藤原貞幹の『六種図考』と『七種図考』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹, Matsuo, Yoshiki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/00000406

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

藤原貞幹の『六種圖考』と『七種圖考』

松　尾　芳　樹

18世紀後期の京都の歴史学者藤原貞幹(ふじわらさだもと)は、その優れた業績にも関わらず一般には正当な評価を得ていると言い難い。その原因のひとつは彼の著作に対する研究の遅れである。本稿は安永7年（1778）の自序を持つ『六種圖考』『七種圖考』という二つの著作について書誌的研究を軸に、貞幹研究における重要性を確認したものである。両書は本来同一の書であり、彼の壮年期の業績を明確に示す歴史資料の集成である。内容的には『大内裏圖考証』を著した裏松固禪と貞幹の学問的交渉を示す内裏図資料を始め、錢幣・璽印・古瓦の集成図などを収録し、彼の代表作『集古圖』の原型として位置付けられるものである。

主要項目：藤原貞幹、『六種圖考』、『七種圖考』、『集古圖』、日本図、大内裏図、裏松固禪、度量、貨幣、印章、瓦

A Study of Sadamoto Fujiwara's "Rokusyu Zu Ko" and "Sichisyu Zu Ko"

YOSHIKI MATSUO

A history scholar SADAMOTO FUJIWARA in Kyoto of the latter part of the 18th century does not obtain a correct evaluation regardless of the excellent achievement. One of the causes is the delays of the research of his writings. This text points out importance in a study of SADAMOTO about his 2 writings named "ROKUSYU ZU KO" (Corpus and Research on Six collections of Historical Materials) and "SICHISYU ZU KO" (Corpus and Research on Seven collections of Historical Materials). These are originally the same writings. We are clearly shown by them his achievement at the prime of life. Main content of these writings is the collection charts such as coins, stamps, and tiles including the Map of the Imperial Residence which shows association of KOZEN URAMATSU who writes "DAIDAIRI-ZU KOSYO" (Research on the Map of the Great Imperial Residence) and SADAMOTO in the study. Therefore, they are considered as the prototype of his representative writing "SHUKO-ZU" (Corpus of Historical Materials).

Key terms : Sadamoto Fujiwara, "Rokusyu Zu Ko", "Sichisyu Zu Ko", "Syuko-zu", map of Japan, Map of the Great Imperial Residence, Kozen Uramatsu, measures, coins, stamps, tiles

1：はじめに
2：『六種圖考』『七種圖考』の諸本
3：『六種圖考』と『七種圖考』の関係
4：『六種圖考』『七種圖考』の内容
4.1：巻一「輿地」と『改正日本輿地路程全圖』
4.2：巻二「都城宮城内裏八省院豊楽院中和院太政官」と『大内裏圖考証』
4.3：巻三「飲饌」と『厨事類記』『世俗立要集』『釈奠考』
4.4：巻四上「錢幣」と『錢譜』
4.5：巻四下「度量」と『集古圖』
4.6：巻五「璽印」と『公私古印譜』
4.7：巻六「碑誌」と『集古圖』
4.8：巻六附録「古瓦」と『古瓦譜』
5：おわりに

1．はじめに

18世紀後期の京都にあって、歴史学・考証学の分野に学識の高さを知られた人物は藤原貞幹（ふじわらさだもと）である。貞幹の伝記や業績については、吉澤義則氏、清野謙次氏、川瀬一馬氏、竹居明男氏らによって紹介されており(1)、彼の業績に対する現段階での問題点についてもこれら論考の中に示されている。貞幹の学問には資料としての価値のみならず、方法の面でも今日見直されるべき価値を持つが、彼を一人の思想家として正当に評価するためには、基礎資料となる彼の著作に対する研究の遅れが大きな障害となっている。

貞幹の学問の根底には実物資料に基づく実証的態度があったため、彼の制作した集成図の持つ意味は重い。従って、その中で最も大部な『集古圖』が貞幹研究に占める位置は極めて重要だ。この著作は多くの歴史遺物を収集し、材質または用途によって分類して、その図を示すことを目的としたもので、流布本は25巻で構成されている。この著作については拙稿「藤原貞幹の『集古図』」(2) に詳述したが、その真価は歴史研究に関わる遺物を分類・聚合させ体系化したところにあり、伝世品のみならず発掘による考古資料をも取り込む広い視野を示す点にあるとされる。また、しばしば考証家に引用される図を収録していたことでも、文化史に果たした役割は少なくない。同時代に生まれたこの種の著作としては松平定信（1758～1829）の編纂した膨大な集成図『集古十種』(3) があるが、質的にはこれに比肩すべき内

容を持つといえよう。

そして『集古圖』に先んじて、貞幹が自分の収集した資料を公開すべく集成したものが『六種圖考』及び『七種圖考』である。両書について初めて考察を加えた清野謙次氏は、「私の研究した結論から逆に云ふと、貞幹は壮年時に先づ六種圖考、七種圖考を著した。晩年に近づいて兩書の材料を組み合せ、其所載品目を整理し、又増加し、更らに新たに若干の項目を加へて集古圖を作ったと思ふより外はない。」(4)として、この両著作を『集古圖』の原型と位置付けた。

本稿は貞幹の学問思想を解読する基礎研究として、この『六種圖考』及び『七種圖考』を取上げ、書誌的な考察を試みたものである。両書は貞幹の集成図編集を考える上で極めて重要な位置にありながら、諸本についても内容の検証についても十分な成果を見せておらず、研究はほとんど停滞している状況にあると云ってよい。

本論に入る前に、貞幹の周辺について簡単に触れておく必要がある。「藤子冬略傳」(5)等により記す。姓は藤原、諱は貞幹、享保17年（1732）6月23日仏光寺山内久遠院主玄熙を父に京都に生まれ、その祖は日野家光に連なるという。字は子冬。藤叔蔵とも称し、蒙齋・無佛齋・端祥齋とも号した。11才にして僧となったが18才頃還俗して儒学を学び、以後仏教を嫌った。生涯貧しかったにもかかわらず、早くから好古の癖があり、種々の資料書籍を集めた。古事に詳しく書物に通じた。また、篆刻・料理・音楽にも通じ多趣味であった。交遊はその学問の広さ同様に広範であり、橋本経亮（1760～1806）、柴野栗山（1736～1807）、木村蒹葭堂（1736～1802）、裏松固禪（1736～1804）、伊勢貞丈（1717～1784）、木内石亭（1724～1808）らの名が挙げられる。寛政9年（1797）8月19日病を得て没した、享年66才であった。

貞幹の著作は相当の数になるが伊藤益氏の「藤原貞幹稿本・摹本目録」(6)及び『国書総目録』に収録された文献のうち、模写、模本、校訂本を除いた著編作の中から代表的なものを整理したのが付表1である。この表に収録された文献のうち、京都洛東真如堂の北にある貞幹の墓碑に刻された銘文(7)に示されたものは、『天智帝外紀』『延暦儀式帳考図』『楽制通考』『七種圖考』『古印譜并考』『錢譜』『集古圖』『逸号年表』『書学指南』(8)『好古日録』『好古小録』の11書である。銘文に他の著作を押し退けてこれらが刻された意図はまた考察の対象となろうが、『七種圖考』と『集古圖』の名がそこに見えることは注意したい。銘に示された著作に含まれた二著作と、割愛された『六種圖考』の関係、そしてこれら三書と貞幹の他の著作との関係を解読していくことがどれほど意味のあることかは、銘文が僅か 208字に過ぎないことからも理解されよう。

付表１　藤原貞幹主要著作（現存書名）

歴史	天智天皇外記 御陵所考 宮殿集説 殿舎集説 殿舎考(無佛齋随筆) 寛政造内裏私記 楽制通考 釈奠考	延暦儀式帳考註 衝口発[天明元年刊] 国学備忘・閲史大疑 歴史日本伝略註 後漢書倭伝考註・魏志倭人伝考註 逸号年表(異号年表)[寛政10年刊] 国朝書目[寛政3年刊] 臂嚢私記
考古	古瓦譜(瓦譜) 印章私記 佛刹印譜 集古圖続録 公私古印譜(歴代古印譜)[明治20年刊] 歴代外印鋳造私考 金石遺文 船氏墓志考 辨帖箋 蒙齋日録 端祥齋帖 錢譜 寛永錢譜 錢幣私記	満漢鎖語 六種図考 七種図考 集古図 好古日録[寛政8年刊] 好古小録[寛政6年刊] 好古雑記 遊高山寺手録 盈科堂日録 無佛齋日録 亀石堂日録 亀石堂雑記 遊古世帖 和漢雑集
諸芸	詠百首和歌 紙譜	鷹鶻私録 仁智要録－外楽曲雑抄
書簡	無佛齋手簡集[立原甚五郎宛]	藤無佛齋簡牘[蒔田喜兵衛宛]

※（）は別称、また〔〕は備考。

２．『六種圖考』『七種圖考』の諸本

先に触れたように、両書についての研究は清野謙次氏が『日本人種論変遷史』中に示したものが早い。そしてこれがほとんど唯一のものと云える。清野氏は両書を初めて紹介し「集古圖の生みの親」と位置付けた。後に川瀬一馬氏が静嘉堂文庫本『七種圖考』を紹介したものがあるが考察に至らず、斎藤忠氏が『日本考古学史辞典』(9)に「六種図考」「七種図考」の項目を採って解説するところも上二者の記述に導かれるものである。

清野氏、川瀬氏によって紹介された両書写本は清野氏旧蔵の『六種圖考』と『七種圖考』そして国会図書館蔵『六種圖考』、静嘉堂文庫蔵『七種圖考』の四本である。

両著作の現存諸本を『国書総目録』によって補えば内閣文庫、東京大学（２本）、東京大学史料編纂所、学習院大学、大阪府立図書館に所蔵される『六種圖考』６本を加えることができる(10)。全て集めて10本にすぎない写本の数は決して多いものではない。しかも清野氏旧蔵の『六種圖考』については現在所在を確認することができず、後に述べるとおり大きな疑問を遺す原因となっている。従って『七種圖考』については現在天理大学附属天理図書館の所蔵となっている清野氏旧蔵本と静嘉堂文庫本の２本の

みが知られ、『六種圖考』については７本が確認されるにすぎない。

まず、両書研究の発端となった清野氏旧蔵本（以下清野本）について、氏の報告[11]をまとめてみよう。

清野本『六種圖考』は文化３年（1806）舷々樓主人という人物により精写されたもので、一玉器、二磁器、三古鏡、四古鈴、五飲饌、六古升という六部門からなっている。

清野氏が引用している序は次のとおり。

幹性愚凡於世好一無所解獨好古之

病渝於骨髄凡可以徴古者雖片楮半

葉廢盆毀瓦藏而不捨摹而不遺

庶幾得以補圖書之闕也積數年

掇集編録頗得所據乃新修抄出

名六種圖考一曰玉器二曰磁器

三曰古鏡四曰古鈴五曰飲饌

六曰古升附

安永戊戌冬至日左京藤貞幹 ㊀（白文方印「子冬氏」）

自筆ではないが貞幹の「子冬氏」印まで精写しているところから、信頼性のある写本と判断し、年紀に従い安永７年（1778）の著作と考えている。内容的には図を主体にしたもので、『集古圖』と極めて近似した形式を採っている。付表２にこの清野本『六種圖考』と25巻本『集古圖』を対照してみた。『六種圖考』の詳細な資料名が不明のため、正確な比較はできないが、巻一、巻二、巻五、巻六は『集古圖』に収録される資料と量的にあまり変化がない。巻三について清野氏は内容を示していないが「例へば六種圖考中古鏡の多數は學術上の價値乏しきものだが、集古圖では之れを省略して精良品が多くなった。」[12]として異同を報告する。また巻四は量的にも質的にも異同が大きいようだ。

付表２　清野本『六種圖考』と『集古圖』の比較

『六種圖考』（清野氏報告内容）		『集古圖』（25巻本のうち対応するもののみ）	
巻一	玉器（曲玉15個、切子玉３個、管玉５個）	巻11	玉器（曲玉17個、切子玉３個、管玉８個）
巻二	磁器（祝部類14個、他７個）	巻14	磁器（20個）
巻三	古鏡（報告なし）	巻６	銅器（古鏡39種）
巻四	古鈴（21個の内出土品７個）	巻４	銅印（古鈴13個）
巻五	飲饌（糕餅25種）	巻19（補闕）	糕餅部（28種）
巻六	古升（銅升１個、木升10種）	巻３	度量（銅升1種、木升11種）

一方『七種圖考』はといえば、貞幹自筆の草稿本と思われるもので、柳川藩の蔵書印と橘守部（1781～1849）の蔵書を示す「椎本文庫」の印がある。内容は巻一輿地、巻二都城宮城内裏八省院豊楽院中和院太政官、巻三飲饌、巻四禮服、巻五上錢幣、巻五下度量、巻六璽章、巻七碑誌、巻七附録古瓦の九部門から構成され、図を主体とするものと文献考証を主体とするものとが混在している。序は先の『六種圖考』の序同様安永７年（1778）のものと見られるが量は倍している。

幹性愚凡於世好一無所解獨好古
之病渝於骨髄凡可以徵古者雖片楮
半葉廢盆毀瓦藏而不捨摹而不
遺庶幾得以補圖書之闕也積數年掇
集編録頗得所據乃新修都城宮城
及八省豊樂両院圖又作璽章錢幣
二譜及度量圖近有一士人改正地圖
頗稱詳檢先輩又有内裏及中和院太政官
圖校訂精到雖天平之圖不存弘仁
之制無聞亦可無遺憾矣頃得閑整正
其次并之以所曾抄出飲饌冠服碑
誌圖名曰七種圖考一曰輿地二曰都
城宮城八省院豊楽院中和院内裡
太政官三曰飲饌四曰禮服五曰錢幣
度量六曰璽章七曰碑誌古瓦附
安永戊戌冬至日左京藤貞幹 印（白文方印「藤貞幹印」）印（白文方印「子冬氏」）

『集古圖』と比較した場合、巻五下度量が25巻本『集古圖』の巻三度量に、巻七碑誌が同巻21碑銘及び巻22葬具にそれぞれ対応している。後述するとおり巻三は『集古圖』と重複する資料が少なく直接の関係は薄いように思われるが、巻七は重複する資料が多く内容的に連続したものと見られる。

清野氏はこのふたつの写本より『六種圖考』と『七種圖考』を同時期に著述した兄弟本とし、『集古圖』の原型と考えた。この見解は主に清野本『六種圖考』の内容に起因するところが大きいと考えるが、ここには大きな問題がある。

清野本『六種圖考』の内容は、他に確認できる写本がなく孤本であることに加え、この写本そのものの所在が現在確認できない。その上現存する『六種圖考』の写本は全て『七種圖考』と極めて近い内容を持っているのだから、両書の関係が決して単純でないことが分る。

いったいこの事実は何を意味するのだろうか。まず清野本と静嘉堂文庫本の『七種圖考』を比較してみよう。清野本は貞幹の自筆稿本で、唯一完全に揃った『七種圖考』写本である。従って巻四に禮服部を持つのはこの写本しかない。静嘉堂文庫本は序の他に、一輿地、二宮室、三飲饌、五度量、六璽章、七碑誌の六部門を遺すばかりの写本で、貞幹自筆部分は序と六璽章のみという不完全なものである(13)。従って禮服、錢幣、古瓦といった部門を含まないが、巻末の貞幹自筆という目次には「附錢幣・四上古瓦」とあるというから、この一本に禮服部のみが欠けていた可能性が高い。つまり清野本と静嘉堂文庫本は内容を異にしたことが考えられる。清野本必ずしも定稿とは限らなかったことをまず確認しなければならない。

そして『七種圖考』が禮服部を含まないとすれば、奇妙なことが起る。つまり、輿地・都城宮城内裏八省院豊楽院中和院太政官・飲饌・錢幣・度量・璽章・碑誌・古瓦の八部門が『七種圖考』の基本的構成要素であることになる。これは現存する『六種圖考』諸本の構成と等しくなり、両書は同じものとなるのである。

現存『六種圖考』写本のうち国立国会図書館本は貞幹自筆のものと思われ、序と巻一輿地から巻三飲饌まで3巻一冊が遺されている。貞幹の印章を捺す安永7年（1778）の序を、清野本『七種圖考』のものと比較してみたい。

幹性愚凡於世好一無所解獨好古之
病渝於骨髓凡可以徵古者雖片楮半
葉廢盆毀瓦藏而不捨摹而不遺
庶幾得以補圖書之闕也積數年
掇集編録頗得所據乃新修都城
宮城及八省豊樂両院又作璽章錢
幣二譜及度量圖近有一士人改正
地圖頗稱詳檮先輩又有内裏及
中和院太政官圖校訂精到雖天
平之圖不存弘仁之制無聞亦可無
遺憾矣頃得閑整正其次并之以
所曾抄出飲饌碑誌圖名六種圖
考一曰輿地二曰都城宮城内裏
八省院豊楽院中和院太政官三曰飲
饌四曰錢幣度量五曰璽章六

日碑誌古瓦附

安永戊戌冬至日左京藤貞幹子冬父識　印（白文方印「藤貞幹院」）印（白文方印「子冬氏」）

これを見ると、下線で示した部分以外は全て字句が同じであり、同一の序というべきである。現存『六種圖考』諸本の序は全て同一の字配りを以て2丁4頁に書かれている。従って、清野本『六種圖考』の序は本来の序の中間部分を略し、書き直したものと考えなければならない。清野本の「積數年／掇集編録頗得所據乃新修抄出／名六種圖考」の部分が書き直した箇所だが、本来の序の各部門の成立状況を略述した部分91字を割愛し「新修」と「抄出」の2語のみを抜出してすませている。清野本の特殊性がここにもあらわれている。

貞幹が伊勢の蒔田喜兵衛（1738～1801）に宛てた書簡[14]の中にこの『七種圖考』に関するものがある。

「七種圖考の事栗山堂取計に而、上木之積り御座候所、入銀之事貴家へも江戸表より申参り候由御面働の御事畏入奉候。此節校合七八分出來仕候御蔭にて、上木相納申候様に仕度候。錢幣度量璽章部下藥、江戸表より参り候由、いつにても御勝手に御上し可被下候」

蒔田喜兵衛は伊勢の御師龍太夫の代官で書画に親しみ、諸家と交流のあった人物で、この書簡は4月9日の日付があるばかりで年号はないが、三村清三郎氏が考証するとおり[15]、安永9年（1780）の書簡とすることに異論はない。文面からすると柴野栗山の働きで江戸に於て『七種圖考』出版の企画があったらしい。校訂作業もかなり進んでいたようだから、これが実現していないところをみると清野氏の指摘のように[16]出版費用が障害となったのであろう。これは『七種圖考』の序が著されてから1年半後の書簡だから、現存する自筆稿本は直接この出版に関わるものであった可能性は高い。

安永7年（1778）時、栗山は江戸に住していたから、恐らく『七種圖考』の草稿は江戸と京都を往来したはずである。そう考えると、書写の機会も少なくなかったと思われるのだが、現に『七種圖考』の写本は少ない。この書を知る人は刊行のことを知っていたため、写すことがなかったのかもしれないが、刊行が不可能となった後もこの書は写されていないようである。

大阪府立図書館本『六種圖考』には「寛政十一年初夏抄杉田伯元所蔵貞幹滴筆原本／桂林舎主人志印（桂川之印）」の墨書がある。寛政11年（1799）の写本であることがわかる。現在確認できる最も早い写本である。書写した桂林舎主人は桂川甫粲（1754～1808）と思われる。甫粲は戯作者・蘭学者として知られた人物だが、彼が杉田元伯の養子となった蘭医杉田伯元（1763～1833）の蔵書を写したという記事は注目すべきであろう。伯元は元伯の収集した蘭書を増補充実に勤めたという蔵書家でもあった。貞幹が寛政9年（1797）に没した2年後、伯元のもとに貞幹自筆の『六種圖考』が所蔵されていたことは、彼の稿本の流転を知る意味でも興味深いのだが、何より海外の知識に関心の深い彼等蘭学者が貞幹の著作を所蔵していたことが面白い。甫粲の書写は極めて丁寧なもので、全巻が精写されており、巻四

上「錢譜」には4箇所[17]に甫粲の註がある。伯元の手元にあったものが、現在の国会図書館本と同じものかどうかは、蔵書印等の決め手がなく確証がないが、両者を比較すると共に上下二冊の装幀となっているばかりか、字句の訂正箇所の様子や朱描きなど細部に至るまで一致しているところからその可能性は高いと思われる。従って草稿本に失われている巻四以下の様子を知るためにも本写本は極めて有益なものといえる。

2本の東京大学本には「南葵文庫」の蔵書印がある。5冊本と2冊本があるが、字配りにまで気をつかい精写されているのは5冊本で、こちらには「紀伊國徳川氏圖書記」の印があって、紀州徳川家の旧蔵であることが分る。2冊本は序から巻三飲饌の中ほどまで精写、あとは省略こそないが詰込むように追込みで写している。こちらには「南葵文庫」の印しか見えず、明治36年（1903）に同文庫が古書を購入した旨記されているから、架蔵の経緯は異なっている。5冊本は紀州の国学者長沢伴雄（1804～1855）の手澤本であり、朱註が巻四上と巻四下に8箇所[18]書入れられている。2冊本はこれを写したものらしく、註もそのまま書写されている。巻四下に「天保七年九月七日比校了　伴雄」、巻六附録に「右六種圖考三巻以内藤廣前蔵本令騰写加一校畢／天保七丙申年九月八日　長澤伴雄」とあって天保7年（1836）の写本であり、江戸の国学者内藤廣前（1791～1866）の蔵書によったことが分る。廣前は『大内裏圖考証』の校訂を行い、『丹鶴叢書』を編纂するなど有職故実に詳しい人物であった。巻二に内裏関係の図が多数収録されているところから、彼がこの書を所蔵していたことは理解しやすい。

また「浅草文庫」印を持つ内閣文庫本6冊も全巻揃って精写された長沢註『六種圖考』の一本に加えられる。学習院大学本2冊は全巻精写されており、「木街狩墅氏之文庫」印を持つ。この印は狩野栄川以後木挽町狩野家に於て使用されたもので、漢画系絵師の家に伝えられたことは興味深い。書写に関わる墨書はないが一部に長沢註を書き写している箇所があり、長沢註写本に関わる一本と思われる。

このように現存する『六種圖考』の写本には二つの系統があることが分る。一つは杉田伯元所持本の可能性がある貞幹自筆稿本と原本から桂川甫粲が写した写本の系統で書写の本流にあるもの。原本である国会図書館本と大阪府立図書館本がこれにあたる。いま一つは内藤廣前所蔵本から長沢伴雄による註が加えられた写本の系統で、これは紀州、尾張の徳川家や幕府との関係が想像できる。東京大学本2本と内閣文庫本、学習院大学本がこれにあたる。

東京大学史料編纂所本『六種圖考』は明治にはいってから修史館の命令で書写されたものという[19]。これは精写されているが若干の落丁がある。また巻六附録古瓦が唐紙による実際の拓本となっていて、特殊な成立状況を持つ写本といえる。恐らく何らかの経緯で入手した古瓦拓本を補完するため書写したものではなかったかと想像する。この写本には長沢註がないこと、長沢註系統の写本には欠落している序に捺された二つの印影を書き写すこと、また原拓を含むことなどから原本とかなり密接な関係を持つ

写本と考えられる。

3．『六種圖考』と『七種圖考』の関係

清野氏がこの両書を『集古圖』の生みの親とした理由は、主に清野本『六種圖考』の内容によるものである。しかし、清野本が成立不明の異本として見る他ない現在、内容的に直接『集古圖』との関連を見ることは問題なしとしない。ただ貞幹がそれまで著録してきた集成図を編集し合綴するという考えを実行に移した点は、『集古圖』編集の原点に位置することはまちがいない。

『集古圖』の編纂が始められたのは寛政4年（1792）頃のことだから[20]、両書が著された安永7年（1778）はその14年前にあたる。付表2のとおり清野本『六種圖考』の資料概要を見ると、その内容は寛政9年（1797）まで編集を続けられた『集古圖』の最終的な草稿と部門によって異同があることが分る。もし、清野本『六種圖考』が貞幹の編集になるものであるとするなら、つまり『六種圖考』が二種類あるとするなら、『集古圖』の編集過程について貴重な示唆を得ることが出来るのだが、原本を確認できないことが惜しまれる。

貞幹の蒔田氏宛て書簡により、序が書かれた2年後である安永9年（1780）頃には『七種圖考』の存在が確認できる。この時の『七種圖考』が果たして、清野本の内容であったのか、静嘉堂本の内容であったのか分らないのだが、あるいは禮服部はこの上梓用草稿からは省かれていたのではないかと考えている。というのもこの部門は他の部門に比較して、刊行に至る動機がいまひとつ不明なためである。巻四禮服部は、大嘗祭関係の禮服を中心に集めたものといえるが、実証的資料図の多い貞幹の集成図としては故実書の抜写という印象が強く、精彩を欠いている[21]。また、付表1からも分るように、この分野における貞幹の著作や考証の類が少ないことから、貞幹自身が安永7年の時点で、強いて上梓を行う必然性を感じていたか疑問を感じてしまうのである。

巻四上錢幣、巻五璽章、巻六附録古瓦については、既に単独の集成図を制作していたし、巻四下度量、巻六碑誌は『集古圖』と関わりが深く、資料の蓄積や研究もかなり進んでいたはずである。また巻一輿地は当時最新の日本図を基に、朝鮮図と日本図を組合わせることで彼流の日本観を示しているし、巻二都城宮城内裏八省院豊楽院中和院太政官は、『大内裏圖考証』を編纂した裏松固禅に協力するほど深い造詣を示した研究領域であった。さらに巻三飲饌は古書の抄録にすぎないが、『釈奠考』を著した貞幹の考証の基礎資料を示す点や、『大内裏圖考証』[22]にも収録された昼御膳の図を『厨事類記』[23]から記録している点が注目される。このように巻四以外の巻については、貞幹の著作活動と密接な関係を跡付けることが可能である。ところが、禮服部の資料を『集古圖』の巻5「服飾」と比較した場合、連続性はほとんど見られない。従って、本部門はその後の貞幹の研究活動との関わりも薄弱であり、皇室研

究に関わる孤立した資料と見るべきものであろう。このように考えると、静嘉堂文庫本『七種圖考』や流布本『六種圖考』についても、清野本『七種圖考』から禮服部が割愛された写本と見ることが妥当と思われる。

『六種圖考』と『七種圖考』の名称には内容的にかなり問題のあるところで、附録の古瓦を除くと七部門からなる『六種圖考』はむしろ『七種圖考』と呼ぶ方が適切な気もする。しかし『六種圖考』の巻四は錢幣を上、度量を下として形式的に分けてはいるものの、本来「制度」に関する巻としてあくまで一群と考えていたと思われるため六種として問題はない。

清野氏は「要するに六種圖考と七種圖考との兄弟本は貞幹壮年時代の作で、之れを基本として晩年の好古日録、好古小録、集古圖の類が編み出されたのである。」(24) とするとおり、両書を兄弟本として同時に編集されたものと考えている。しかし、これまで見てきたように、『六種圖考』と『七種圖考』が内容的に同じものだとすれば、これは兄弟本というより改訂本というべきものであろう。従ってその成立には後先があるはずである。

禮服部への考察にみたように、『七種圖考』が『六種圖考』に先行したものであったと考えるなら、同一の著作が異なる名を持つに至った理由も想像しやすい。貞幹が巻六附録も含めて最大9部門を含む『七種圖考』を『六種圖考』と改めたのは、『七種圖考』の巻四禮服を割愛したことによるものであろう。つまり改称の理由は、内容上の単純な引き算が行われた結果であると考えたいのである。

先に述べたとおり静嘉堂文庫本『七種圖考』が禮服部門を割愛した稿本と見ると、「附錢幣・四上古瓦」という目次の字句を、巻四下に唯一表記されていない部門である禮服部があった痕跡と解釈することができる。つまり先に述べたように『七種圖考』の段階で既に禮服部が割愛され七種が六種となる兆候は生まれていたのである。従って割愛が確定した後には、書名を当然七から一つ減じて六とせざるをえなくなった。同一の書でありながら、たまたま内容とする集成の数量によって書名をつけたばかりに、変更を余儀なくされてしまったのである。

貞幹死後墓碑銘にまで刻まれた『七種圖考』の写本がほとんど流布しないで、『六種圖考』のみが写本として流布したことも、より完成度の高い写本が書写された結果と見ることができる。従って後世の作になる墓碑銘に『七種圖考』の名が収録されたのは、著作の完成度からではなく、上梓の計画が立てられたことに対する歴史的評価ではなかったろうか。

両書の内容を検討すれば、こうした仮説がさらに説得力のあるものとなる。例えば『六種圖考』と『七種圖考』の巻二を比較すると、後述の通り（4.2 の項参照）内容的に『六種圖考』の方が増補整理された形跡がある。従って清野氏が序の年紀から判断したように両書が同時に編纂されたものとする見解には賛同せず、上述のとおり『七種圖考』の編纂後『六種圖考』に改訂改称されたと考えたい。

貞幹は同種の本の序は後に改編しても特に改めないで最初に序を書いた時の年紀を踏襲することがある。『古瓦譜』[25] のようにまるで別本に見えるほど大きく異なり、しかもかなりの時間の経過した改編であっても同様の例[26] があるから、『六種圖考』あるいは『七種圖考』においても安永7年（1778）時の序がそのまま使われる場合があって不思議はない。両書が基本的に同一であるとすれば、版行に努力した『七種圖考』が存在する期間『六種圖考』が併立する理由も見当たらない。だから、時期的には『六種圖考』への改訂は安永9年以後のこととしなければならないが、内容的に大きく変化しているわけではないから、この時期からさほど遅れるものではないだろう。推測にすぎないが、『七種圖考』刊行の見込が消えたことが改訂の契機になったものと考えている。今後新たな資料の発見が待たれる。

ちなみにプレ『集古圖』の体裁を持っている清野本『六種圖考』がもし貞幹自身の編集によるものだとしたら、これは現存『六種圖考』成立の後に、内容の見直しを図り、成立したものと考えるべきだろう。つまり、現存『六種圖考』への改編と『集古圖』編纂の中間に清野本を位置づけるのである。そう考えることで『七種圖考』の序を利用した清野本の序が初め半分に削られ、やがて『集古圖』に至り割愛された経過も理解しやすくなる。

整わない資料が多く、推測の領域で組み立てられた仮説だが、両書編集の過程を整理するとこのようになる。安永7年（1778）にそれまで集成した資料を中心に『七種圖考』が編纂された。この中には初め禮服部があったが後に割愛された。同9年その上梓の計画が生まれるが実現しなかったのを契機に『六種圖考』と名を改めた。やがて新たに歴史遺物の集成図を中心とした内容へと見直しを図り清野本が生まれたが、すぐさま『集古圖』編纂へ拡大することを企画したため、これはほとんど知られないまま寛政4年（1792）の『集古圖』編集が開始し、その作業の中に埋もれてしまうことになった。『無佛齋手簡』[27] に収録される寛政元年から5年（1789～1793）の間の貞幹書簡には両書の名が見当たらないため、天明期中にこうした編集作業は終了していたと考えるべきだろう。

4．『六種圖考』と『七種圖考』の内容

両書の内容を検討するが、先に述べたとおり清野本『六種圖考』は原本が確認できない上に孤本であるため、割愛せざるをえない。ここでは現存『六種圖考』の写本を基本として清野本『七種圖考』の異同を補うこととする。

4.1：巻一「輿地」と『改正日本輿地路程全圖』

巻之一である「輿地」は北海道南部から南西諸島、南朝鮮までの日本図を分図にして北から南に向かい並べたものだ。『六種圖考』では 11丁に書写される[28]。この地図は経緯度の書込みや墨書の表記より、長久保赤水（1717～1801）の制作した『改正日本輿地路程全圖』の模写であることが分る。赤水の

日本図はそれまで普及していた流宣図のような装飾的絵画的なものから、現実の地形を表した地理学的なものに移り変わる契機となったもので、安永8年（1779）に大阪の浅野弥兵衛が発行した。この図の最も特徴的なところは民間に流布した日本図として初めて経緯線を付したことで、国絵図を参考に編集されたため当時としては相当の精度を持つ図であることも手伝って、大いに賞賛された。

この図には安永4年（1775）の柴野栗山による序があり、この刊行に木村兼葭堂の力があったところから、もとより貞幹との接点は見出しやすいのだが、詳細に『六種圖考』の図と『改正日本輿地路程全圖』を比較すれば、十里を一寸とする縮尺（約 130万分の一）は等しいのに対し、地形の描写が細部において簡略化されていることが気になる。経緯線との位置関係から、単に書写の際の省略と思えず、地形図そのものが未完成のように見える。

赤水がこの出版のため京阪を訪れたのは安永3年から4年にかけてのことだが、赤水と栗山や兼葭堂との関係からすれば、貞幹がこの原図を閲覧することは容易いことであったはずだ。だから、この時期既に『改正日本輿地路程全圖』の原図が完成していたとするなら、貞幹が完成した原図を写す機会がなかったとは考えられないから、貞幹が書写した原本は『改正日本輿地路程全圖』の原図ではなくその前段階にあるものではなかったかと思う。「赤水は安永8年の刊行以前に署名のない試作図を開版していたらしいが」(29) とする室賀信夫氏の言葉は何を根拠にしたものか分らないが、『六種圖考』の図にそうした試作図という印象が強い点が気になるところである。

赤水が兼葭堂との交わりを持つのは安永3年以前のことと考えられるから、貞幹が『改正日本輿地路程全圖』となって完成した図を見る以前に赤水の日本図を見る機会がなかったとはいえない。この日本図が『改正日本輿地路程全圖』と基本的には等しいものの、細部において完成度が低い日本図を写し、その後正確な版刻用の原図を見る機会がありながらあえて訂正しなかった貞幹の考えがどのようなものであったかは分らない。貞幹にすれば正確詳細な日本図は赤水によるものがあれば充分とし、以前に写した区分図をもって日本の全体像を簡単に確認できる資料を作ろうと考えていたのではないだろうか。実際『改正日本輿地路程全圖』は発行されたものの、極めて高価なもので民衆の手に届く性格のものではなかったという。

内容的に『改正日本輿地路程全圖』と『六種圖考』巻一が異なるのは、地形の簡略化と地名の省略の他、『改正日本輿地路程全圖』に瓢箪島が割愛されている事と朝鮮地名の記入が『六種圖考』において極めて多いことである。貞幹が原図では単純な朝鮮図を詳細化した背景には、『衝口發』(30) によって朝鮮と日本文化の深い関係を説いた彼の日本観をよく表したものといえる。

4.2：巻二「都城宮城内裏八省院豊楽院中和院太政官」と『大内裏図考証』

巻之二は都城図・宮城図及び内裏・八省院・豊楽院・中和院・太政官の平面図を描く。国会図書館本『六種圖考』によってその内容を示すと。

平安都城圖（左京図・右京図）

平安古制都城（考証）

同延喜都城（考証）

平安宮城圖

同圖

新修平安宮城圖

古宮城圖

新修平安内裏圖

新修八省院圖

新修豊樂院圖

新修中和院圖

新修太政官圖

この巻は54丁で構成されているが、清野本『七種圖考』は47丁[31]と少ない。これは落丁によるものと思われる。清野本は落丁の他錯乱もあり単純に比較できないのだが、上記の「平安古制都城」から「古宮城圖」までの落丁が著しい。また『六種圖考』においても一部落丁の存在が想像できる部分がある[32]。

両書の各圖を比較すると、幾つかの異同が見出される。「新修豊樂院圖」「新修中和院圖」が『六種圖考』では「以曲尺二分為一丈」であるのに、『七種圖考』では「以曲尺二分五厘為一丈」としており縮率の違いが見られ、明らかに異なる編集作業の所産と分る。また序に表記される八省院が『六種圖考』はそのまま「八省院圖」とのみ表記されているのに対し、『七種圖考』では「朝堂院　一號八省院又中臺」としており、この著作の編集時期では名称が未だ流動的であったことが分る。さらに『六種圖考』では古図の校訂に使用した参考文献として「南都圖同一古圖神泉苑圖應永傳寫宮城圖文亀傳寫豊樂院圖宮城古圖拾芥抄（古本活板印板校本）圖年中行事画巻續日本後紀文徳實録三代實録類聚國史日本紀畧扶桑畧記貞観儀式延喜式西宮記北山抄江家次第左經記玉海大外記頼葉記」と煩雑なほど列挙しているのに対し、『七種圖考』では「南都圖神泉苑圖東寺圖應永傳寫圖拾芥抄（古本活本印板）圖」と少ない点も、編集時期が前後したことを物語る証左といえる[33]。

裏松固禪との親交篤かった貞幹が彼の大著『大内裏圖考証』の編述に力を貸したことはよく知られて

いる[34]。 彼らの交遊は『無佛齋手簡』[35] に収録される寛政元年から五年（1789～1793）の間の消息から具体的に辿ることができる。

固禅が『大内裏圖考証』の編纂に集中したとされる天明年間（1781～1789）以前に貞幹によって内裏圖について一定の考証が行われていたことが分る。しかし、安永７年（1778）時、固禅と貞幹の交流が既に始まっていたか否かは不明である。 固禅が宝暦事件によって蟄居を命じられた時、伊勢に仮寓したという説[36] があるが、安永９年頃の伊勢の人蒔田氏との書簡には固禅の名が現われていない。従ってこの巻二の大内裏図が貞幹一人の手になるのか固禅の考証を踏まえたものかは明らかではない。藤岡通夫氏が示した固禅自筆の可能性のある内裏図[37] と『六種圖考』に分図として収録された内裏図とを比較すると基本的には一致しながらも規模や位置に細かな異同がみられ、直接の転写関係を見ることは難しい。東京大学本の墨書に見るとおり、内藤廣前がこの書を所持していたところから、彼が固禅の考証を受けて天保12年（1841）に刊行した『大内裏圖』[38] の参考にこの書をも使用したことは間違いない。内裏圖研究の過程を知る上で貴重な資料と云うべきである。

4.3：巻三「飲饌」と『厨事類記』『世俗立要集』『釈奠考』

巻之三は「飲饌」であり『厨事類記』及び『世俗立要集』[39] から晝御膳圖として一御臺盤と二御臺盤が図でしめされ、釈奠供物圖が「右大外記良季真人所圖録而弘安十年四月五日／左馬権助宗長朝臣所傳所寫也」という墨書とともにしめされている。

『厨事類記』『世俗立要集』とも飲食に関する書物としては極めて有益なものだが、当時としても決してたやすく披見されるものではなかったと思われ、現存諸本は御厨子所の紀氏や内奉膳司の高橋氏に関わる写本が多い[40]。 この両書については静嘉堂文庫に貞幹の弟子といえる山田以文が寛政５年（1793）に書写した『厨事類記』があり、『世俗立要集』については同じく寛政５年に裏松固禅が書写したものが宮内庁書陵部に所蔵される。固禅は『大内裏圖考証』の中にもこの御臺盤の図を収録しているが、貞幹が安永７年時既にこの書を抄出していることは注目される。『厨事類記』については『集古圖』の「糕餅部」の存在とその注の書込から、古制の飲食に関する興味が高かった貞幹に大いに利用されたらしく、その書名は巻四下「度量」にも見られる。

釈奠については貞幹自身『釈奠考』[41] という著作を遺すほど興味を持っていた分野だが、 巻末の墨書より『弘安十年釈奠供物図』[42] の一本を抄録したものと思われる。 儒者としての貞幹についてはあまり注目されることがないのだが、 貞幹自筆の「秘蔵書目」[43] の巻頭に並ぶ書物が儒書であることからして、彼の思想の基盤に占める儒学の位置は大きいと考える。この釈奠供物図は貞幹の思想の基盤をうかがわせる意味でも興味深い。

4.4：巻四上「錢幣」と『錢譜』

巻之四上は「錢幣」である。「貸泉之利肇見于」という貨幣史考証に始り、「天武天皇朝銀錢」から「乾坤錢」まで25種の貨幣の考証を記している。拓あるいは墨写による図を添えたものも多く、図録としての体裁はかなり整った部門になっている。それというのも、貞幹は早く明和4年（1767）に古錢図録である『錢譜』(44) を著述しており、すでにこの分野において権威の風格があった。内容的には安永3年（1774）の紀宗直（1703～1785）による序を持つ『錢譜』を一部改めており(45)、皇朝錢についてはこれを定稿と考えていたようだ。

収録された貨幣を順番に挙げると天武天皇朝銀錢・天武天皇朝銅錢・持統天皇朝錢・文武天皇朝錢・和銅銀錢・和銅錢・元正天皇朝銀錢・聖武天皇朝銅錢・萬年通寶・太平元寶銀錢・開基勝寶金錢・神功開寶錢・隆平永寶錢・富寿神寶錢・承和昌寶錢・長年大寶錢・饒益神寶錢・貞観永寶錢・寛平大寶錢・延喜通寶錢・延喜通寶鉛錢・乾元大寶錢・乾元大寶鉛錢・乾坤通寶錢となっている。『七種圖考』との異同はほとんどない。

4.5：巻四下「度量」と『集古圖』

巻之四下は「度量」であり、後の『集古圖』第三「度量」に通じる内容となっている。ただ、『集古圖』は図が中心であるのに対し、『六種圖考』では文献からの抜き書きが主となっていて、図がほとんど見られない点が異なっている。従って、実物資料本位の『集古圖』と文献主体の『六種圖考』では収録資料にもかなり異同が生じてくる。『六種圖考』に収録される資料名を挙げると、新修大寶尺（附図）・和銅尺・養老尺・大寶升・和銅升・民部省厨拾合升（附図）・山科升・近江升・東大寺拾合升・元大升・減大升・大升・宣旨升・錢升・反錢升・花國升・稲荷講升・本供升・礒原升・川上升・二月堂拾合升・常十合升・寺升・長著升・斗升・附録　権衡の26種だが、直接『集古圖』と関わるものは新修大寶尺・民部省厨拾合升・宣旨升・反錢升・山科升の五種にすぎない(46)。『七種圖考』との異同はない。

貞幹が参考とした文献としては『続日本紀』『政事要略』『厨事類記』の他、田券の名が見え、また薬師寺や東大寺での実物調査からの記録も収録されている。

4.6：巻五「璽印」と『公私古印譜』

巻之五は「璽印」であり、大宝3年の天皇璽印を初めてとして68種の印影が本編として収録され、「親魏倭王印」1種を附録とし、その印影と考証を記している。この部門も『錢譜』同様、図録としての体裁はかなり整った部門になっている。貞幹はすでに安永3年（1774）の自序を持つ『公私古印譜』(47)を著述しており、この分野においても高い学識を示していた。この『公私古印譜』がその後1世紀

を経て明治20年（1887）に刊行されたことは、この著作が内容的にも示唆に富むものであった証拠となろう。但し、天理図書館所蔵の貞幹自筆稿本『公私古印譜初集』を見ると収録印影は54種とかなり少なく、加えて寺院関係の印影を省くなどの増補改訂が行われたことが分り、編集方針の違いを見ることができる。『七種圖考』との異同は特にない。

収録される印影は1頁につき1～2個捺されており、採集した資料名や考証を加えている。以下『六種圖考』の印字と資料の年紀を示す。

天皇／御璽（大宝3）
天皇／御璽（天平勝宝8／天平宝字4）
天皇／御璽（延長4／保延6）
天皇／御璽〔古模本〕
建武／之寶〔古模本〕
太政／官印（貞観9・18）
太政／官印（元慶・／昌泰2）
乾政／官印〔古模本〕
民部／之印（宝亀8）
宮内／之印〔古模本〕
大学／寮印（大宝3）
圖書／寮印〔古模本〕
雅楽／寮印〔古模本〕
主殿／寮印（貞観2）
典薬／寮印〔医書古本〕
左京／之印（天平感宝元）
施薬／院印（永萬元／仁安元・2）
遣唐／使印（天平5）
遣唐／使印（延暦23）
遣新羅／使之印〔古模本〕
内侍／之印（嘉祥2）
山背／國印（天平7・15）
山城／國印〔國司鮮〕
山城／國印（天永元年）
大和／國印（宝亀8／延暦23）
大和／國印〔國司鮮〕
摂津／國印（天平勝宝8）
伊賀／國印（天平感宝元）
伊賀／國印（天平宝字2）
尾張／國印（天長2）
下総／國印（天平勝宝3）
近江／國印（天平18／天平勝宝3／天平宝字2）
美濃／國印（天平勝宝2）
越前／國印（天平勝宝7／天平宝字8／天平神護2）
越中／國印（天平宝字3／神護景雲元）
丹波／國印〔国郡田券〕8
丹後／國印（天平勝宝元）
但馬／國印（天平勝宝2）
因幡／國印（天平神護元）
因幡／國印（承和9）
紀伊／國印（仁寿4）
阿波／國印（天平勝宝8）
阿波／國印（承和7）
日向／國印〔古模本〕
太宰／府印〔古模本〕
鎮守／府印〔古模本〕
宇治／群印〔古模本〕
宇治／郡印（天平20）

宇治／郡印（承和14）
葛下／郡印（天暦11）
阿拝／之印（天平勝宝３）
足羽／郡印（天平神護２）
坂井／郡印（天平宝字２）
伊都／郡印（仁寿４）
紀伊／守印（長和元）
勧学／院印（弘仁13）
右大臣藤公忠平公印「藤」（延喜20）
古升所用烙印「民部／省印」「拾合」
附録　「親魏／倭王」
添上／郡印（天暦２）
十市／郡印（天平宝字５）
山田／郡印（天平宝字７）
足羽／郡印（天暦５）
高艸／郡印（天慶３）
大和／守印（長和２）
□　（天平神護元）
内親王酒人印「酒」（弘仁９）
「愛」（承平２）

4.7：巻六「碑誌」と『集古圖』

巻之六は「碑誌」であり収録資料は『集古圖』巻22「碑銘」及び巻23「葬具」の一部と全て重複している。但し附録として加えられている古石棺図は本書にのみ含まれる。この分野の資料の収集がかなり早くから纏められていたことが分る。

内容を順に示すと上野國多胡郡碑・陸奥國多賀城碑・楢山御陵碑（同碑隼人石刻図）・下野國那須國造碑・河内國形浦山碑・小野毛人墓誌・楊貴氏墓氏・高屋牧人墓誌・紀廣純女吉継墓誌・威奈大村墓誌・伊福吉部徳足比賣臣墓誌・河内國石河郡山中古墳埴物・筑紫國造磐井墓（石室図・石人図）・附録古石棺（図）の14種で、伊福吉部徳足比賣臣墓誌以前の11種は『集古圖』巻22「碑銘」と、河内國石河郡山中古墳埴物以後の２種は『集古圖』巻23「葬具」の中に含まれている。

『集古圖』と比較すると巻22「碑銘」に見える船氏墓誌と小野毛人墓氏の考証部が欠けている。船氏墓誌については『無佛齋手幹』(48) 中の寛政元年（1789）十一月三日付立原翠軒宛て書簡にその考証の完成を伝えるものがあるから、この書が安永９年（1780）以後に編集されたとしても、寛政元年以前の成立である証拠となる。本書成立の下限を示すものといえよう。

4.8：巻六附録「古瓦」と『古瓦譜』

巻之六附録は「古瓦」で、これは安永２年（1773）の序を持つ『古瓦譜』と深く関わっている。『古瓦譜』については清野謙次氏の考察があり、氏の説では『古瓦譜』には数種あって収録資料も30種から106 種と異同が激しいという(49)。そして『六種圖考』での収録資料 33種については「七種圖考中に載

せた古瓦の數が割合に少數なのは主として内裏關係の瓦と優秀瓦を選んで七種圖考に載せたものであろう」[50] と判断している。収録資料を順に列記すると平城宮殿廢址碧料瓦・同紫褐料瓦・同白料瓦・平安古宮城廢址瓦太極殿碧料瓦・同上（花頭瓦）・同上（牝瓦：面／背）・太極殿廢址瓴甓・白虎樓瓦・春興殿瓦・太政官瓦・民部省瓦・大学寮瓦・雅楽寮瓦・主計寮瓦・木工寮瓦・典薬寮瓦・左京職瓦・検非違使廳瓦・鴻臚館瓦・大宿直廢址瓦・左京築墻瓦・同上・右京築墻瓦・同上・太宰府廢址瓦・多賀城廢址瓦・同黒料瓦・土佐國府廢址瓦・不和関廢址瓦の29種となる。今回閲覧できた写本の中では東京大学史料編纂所本『六種圖考』が、拓本原本を収録しているが、点数は11点しかない[51]。また貞幹自筆と思われる清野本『七種圖考』は『六種圖考』より4点多く[52]、33点全てを拓本によって収録している。

5：おわりに

『六種圖考』『七種圖考』は共に稀覯書というべきもので、決して多くの人の目に触れたものではなかった。しかし、その書物としての価値は著述された当時から一部の識者に高く評価されていたと思われる。柴野栗山によって上梓の計画が生まれたほか、藩庫に収蔵され、内藤廣前、杉田伯元、長沢伴雄、橘守部といった学者が所蔵したことからその評価を察することは容易い。両書は貞幹の学問の根底にある歴史資料全般に対する思い入れと考証に対する実証的態度を最も早く示したものとして貞幹研究に占める位置は大きい。上梓の計画が実現しなかったのは貞幹その人の評価のためにも残念なことであった。

『集古圖』の体系的な部門構成に比較すると、両書の限定された部門立ては、貞幹壮年期の興味の対象をかえって明確に浮かびあがらせてくれる。その収録部門をあえて分類すれば、「輿地」「都城宮城内裏」「飲饌」「古瓦」のように日本とその中心に位置する内裏関係の考証、「度量」「錢幣」という制度への関心、そして「印璽」「碑銘」に現われる金石文の収集ということになるだろう。貞幹考証学の代表著作と見なされる『好古日録』『好古小録』との関係も度量・碑銘部に顕著に表れるし、『集古圖』に割愛された「錢幣」「印璽」「古瓦」という重要な集成図がここに収録されているから、これら著作は補完的存在として捉えることが重要であろう。

本稿では『六種圖考』『七種圖考』が『集古圖』研究また貞幹研究に、極めて重要な書であることを繰り返しているが、これは相互に関係する著作を体系化する作業によってこそ実りあるものとなると考えている。清野本『六種圖考』が確認出来ないことが、この両書の全体像に大きな問題を残すことになっているが、新たな資料の発見を待って再考の機会を待ちたい。

（註）

(1) 吉澤義則氏「藤原貞幹に就いて」（『藝文』第13年８号～12号、京都文學會、大正11年）。清野謙次「日本人種論変遷史」（太平洋協会編、小山書店、昭和19年）。川瀬一馬「藤原貞幹の業績－国学としての意義」（『続日本書誌学之研究』雄山堂書店、昭和55年）。竹居明男「藤原貞幹の古代研究」（森浩一編『考古学の先覚者たち』中央公論、昭和60年）。

(2) 京都市立芸術大学美術学部研究紀要第36号（平成４年）所収。

(3) 寛政12年（1800）序。編集には貞幹と交遊のあった柴野栗山、屋代弘賢らの学者が中心となって働いた。

(4) 清野氏前掲書、459頁。

(5) 吉澤氏前掲書、第13年８号所収。

(6) 『文献』13号、昭和44年、特殊文庫連合協議会。

(7) 吉澤氏によれば「藤子冬略傳」により起草された柴野栗山撰の銘は簡略なものであったらしく（108字）、現在の碑銘（208字）は文化10年（1813）に墓を改修した際、新たに起草されたものという。銘文は吉澤氏前掲書、竹居氏前掲書に収録されている。

(8) 書名か銘文に遺るのみで、現存が確認できない。

(9) 東京堂出版、昭和59年。

(10) 『国書総目録』には東京国立博物館本１冊の名が見えるが、この書は外題が『六種圖考』とあるのみで内容は雑多な博物・考古関係の図を貼り交ぜた別種の本である。従って貞幹のものという確証もない。

(11) 清野氏前掲書、457～466頁。

(12) 清野氏前掲書、461頁。

(13) 川瀬氏前掲書、535頁。

(14) 三村清三郎編「無佛齋手幹附録」（『日本藝林叢書』巻９、六合館、昭和４年）所収。

(15) 三村氏前掲書、１頁。

(16) 清野氏前掲書、463頁。

(17) 和銅錢・萬年通寶・神功開寶錢・冨寿神寶錢の頭注に見える。

(18) 巻四上については貨泉之利肇見于・天武天皇朝銀錢・和銅錢・太平元寶銀錢・隆平永寶錢・寛平大寶錢・乾元大寶錢の７箇所、巻四下については大寶升に頭注が見られる。

(19) 同所、蔵書カードによる。

(20) 前掲拙稿、註(2)参照。

(21) 禮服部の収録資料は次の26種。禮冠・冕冠・小袖・大袖・裳・牙笏・玉佩・長綬・短綬・舄・禮冠・三山冠・牙笏・檜扇・大袖・小袖・帯・裳・左短綬・右短綬・玉佩・錦褥・烏皮沓・肩當・腰當・挂甲。

(22) 寛政９年（1797）献上。『増訂故實叢書』には文化年間に内藤廣前が増訂したものが翻刻される。

(23) 『群書類従』（巻 364、19輯）所収。

(24) 清野氏前掲書、466頁。

(25) 貞幹編、安永５年（1776）序。古瓦の拓本を集成したもの。清野氏前掲書に７種の稿本か紹介される。

(26) 清野氏前掲書（ 438頁）によれば、『古瓦譜』は寛政年間に入って『佛刹古瓦譜』と組み合わされるようになってからも安永５年の序を用い続けたという。

(27) 三村清三郎編、『日本藝林叢書』巻９（六合巻、昭和４年）所収。

(28) 清野本『七種圖考』は９丁で、落丁があるらしく３図を欠く。

(29) 室賀信夫著『古地図抄－日本地図の歩み』（東海大学出版会、昭和58年）、44頁。

(30) 天明元年（1781）刊。皇統をはじめとする日本の諸文化が大陸文化と関連深いことを述べた書。本居宣長はこの書を論駁するため天明５年（1785）に『鈍狂人』を著した。

(31) 現状では巻二に綴じられているのは40丁である。しかし、付図のように折り込まれている内裏図（部分）が、綴じ穴の跡から本来は綴じ込まれていたことが分るため、復元すると７丁分に相当した。これは内裏図の部分図にあてられた通し番号がちょうど７図分欠けていることと符合するため、全て47丁とした。

(32) 少なくとも「新修平安宮城圖」に１丁分２図、「新修平安内裏圖」に進物所・造物所図が欠落しており、落丁が推定される。

(33) ここに挙げられた図や書物を貞幹が所蔵していたことは貞幹の「秘蔵書目」「無佛齋遺傳書領目六」（共に吉澤氏前掲書所収）によって分る。

(34) 『大内裏圖考証』第１巻（『増訂故實叢書』）、櫻井秀『裏松光世とその著作（上）』（歴史地理、28巻４号、大正５年）。西井芳子著「裏松固禪とその業績」（平安博物館研究紀要第２号、昭和46年）

(35) 註(27)参照。

(36) 櫻井氏前掲書、336頁。

(37) 藤岡通夫『京都御所』（中央公論美術出版、昭和62年）、33頁。

(38) 『増訂故實叢書』（吉川弘文館、日用書房）所収。

(39) 『群書類従』（巻 365、19輯）所収。

(40) 『群書解題』（飲食部）99～ 101頁。

(41) 自筆稿本は大東急記念文庫が所蔵。日本の釈奠すなわち孔子祭典の古文献を集め考証したもの。

(42) 東京大学所蔵、写本。

(43) 吉澤氏前掲書、第13年11号。

(44) 明和4年（1767）自序。同7年改訂。古錢の拓影とその考証を纏めたもの。自筆稿本は大東急記念文庫所蔵。

(45) 『六種圖考』『七種圖考』に収録されるのは明和期のものではなく、『日本藝林叢書』巻8に収録される御厨子所預の紀宗直が安永3年（1774）序を著したものとほぼ同じ内容で、かなり改訂が進んだものである。改訂箇所としては神功開寶錢・隆平永寶錢の考証部及び、全体にわたって『拾芥抄』からの抄録を削除する部分が顕著である。

(46) 『集古圖』巻三の収録資料は以下の通り17種。新修晋前尺・法隆寺所蔵牙尺・伯耆守伯近家所傳小尺・阿波守伯近光所傳小尺・法隆寺所傳古大升・法隆寺所蔵銅升・民部省厨升・宣字升・太孝升・内侍所小升・南都薬師寺所傳反錢升・南都薬師寺所用反錢升・一佛刹所蔵山科升・尾州農家所傳古升・興福寺南圓堂油升・平尾村岩崎恒能所蔵古升・興福寺南圓堂応永年中油升。新修大寶尺が新修晋前尺と改められている。

(47) 安永2年（1773）自序。『歴代古印譜』とも称し、明治20年刊本は平野久右衛門が発行人となり、聖華房より発売された。

(48) 註(27)参照。

(49) 清野氏前掲書、403～441頁。

(50) 清野氏前掲書、466頁。

(51) 収録されているのは太極殿廃址瓦縁・太極殿廃址瓦縁・太宰府廃址瓦・土佐國府廃址瓦・右京築墻瓦・左京築墻瓦・白虎樓瓦・木工寮瓦・左京職瓦・平安宮殿廃址瓦・紫褐料瓦の11点。緑釉瓦は顔料により拓を採る。

(52) 豊楽院廃址瓦・神祇官瓦・廩院廃址瓦・多賀城廃址黒料瓦の4種。

（付記） 本稿は㈶鹿島美術財団からの助成を受けた研究「藤原貞幹の『集古圖』の研究」の成果の一部である。